リンパ節転移を認めた軟部悪性腫瘍の 臨床病理学的観察

国立福岡中央病院整形外科

横山 庫一郎・中馬 広一
篠原 典夫

九州大学医学部整形外科

増田 祥男・杉岡 洋一

A Clinicopathologic Study of Soft Tissue Sarcomas with Lymph Nodes Metastases.

by

Koichiro Yokoyama, Hirokazu Chuman
and Norio Sninohara

Department of Orthopedic Surgery, National Fukuoka
Central Hospital, Fukuoka, Japan

Sachio Masuda and Yoichi Sugioka

Department of Orthopedic Surgery, Faculty of Medicine,
Kyushu University, Fukuoka, Japan

Lymphatic dissemination of soft tissue sarcoma is an infrequent occurrence. From published cases, one can establish the incidence of regional lymph node metastases in soft tissue sarcomas as between 2 % and 45 %, depending upon histology, location, and stage of disease. Records of 97 patients of our institutes with a diagnosis of soft tissue sarcoma were reviewed to estimate a clinical importance of prophylactic dissection of regional lymph nodes. Only nine patients had evidence of sarcoma metastatic to draining lymph nodes. Of these patients, four were synovial sarcoma, three rhabdomyosarcoma, and two epithelioid sarcoma. Three of four patients with synovial sarcoma and all three with rhabdomyosarcoma had involvement of inguinal or axillar lymph nodes. Prophylactic removal of draining lymph node areas in most patients with sarcomas does not appear to be worthwhile with the possible exception of synovial sarcoma, epithelioid sarcoma, and rhabdomyosarcoma, although the possibility of direct invasion by the primary or recurrent tumors do exist.

はじめに

軟部肉腫のリンパ節転移の頻度は観察時期の違いから報告により数%から40%以上とまちまちであるが、どの種類の肉腫がリンパ節転移を来しやすいかを知ることが治療計画上有用である。今回、当科および関連機関で治療した軟部肉腫の中でリンパ節転移を認めた例を臨床病理学的に観察したので報告する。

材 料

昭和51年から昭和60年まで当科（一部九大整形外科、九州がんセンター例を含む）で治療を行った軟部肉腫は97例で、うちリンパ節転移のあった症例は滑膜肉腫15例中6例、横紋筋肉腫8例中3例、類上皮肉腫5例中2例、平滑筋肉腫2例中1例、計12例である。ただし滑膜肉腫2例、平滑筋肉腫1例は剖検時、肺門部または気管、分枝部リンパ節に転移を認めたもので、

所属リンパ節転移はなく今回の検討からは除外した。

結 果

滑膜肉腫 4 例で、初回手術時転移のあった例はないが、再発時ソケイ部または腋窩部に腫瘍を認め、組織学的にリンパ節転移であることが確かめられた。鼠径部再発の 2 例は多結節状に大きな腫瘍形成がみられ、うち 1 例は下腿発生例であったが、膝窩リンパ節転移はなかった。また組織学的には 4 例中 3 例は管腔構造の目立つ 2 相型を示し、1 例が主に紡錘形細胞から成る単相型滑膜肉腫であったが、発生部位が腋窩であり、再発時リンパ節へ直接浸潤した可能性が高い。なお初回手術からリンパ節転移までの期間は 1 年から 16 年におよび平均 6 年と長い (表 1)。

類上皮肉腫は滑膜肉腫と臨床的、病理学的にやや類似の性格を示すが、リンパ節転移の頻度も高く、5 例中 2 例が初回手術時腋窩リンパ節に転移を認めている (表 2)。

横紋筋肉腫は 8 例中 3 例に初診時すでにリンパ節転移があり、さらに肺転移も 1 例に認められ 5 カ月から 1 年 2 カ月で死亡している。2 例は大腿から鼠径部に

かけて多発結節状に腫瘍があり、鼠径部切除標本からリンパ節転移または浸潤と判断された。肉眼的にはさらに外腸骨動脈から中枢例の動脈周囲に腫瘍の増殖が明らかで、手術切除は不可能であったが、きわめて予後不良の一因と考えられた (表 3)。

考 察

滑膜肉腫、類上皮肉腫、横紋筋肉腫のリンパ節転移の頻度が他の肉腫に比較して高いことは多くの文献からも明らかであるが、今回の検索では純粋なリンパ節転移に加えて、転移性再発腫瘍が、リンパ節近傍に発生しさらにリンパ節へ直接浸潤していった可能性を示唆する所見が得られた。

滑膜肉腫 (2 相型) の 2 例は多結節状腫瘍が鼠径部に再発し、一部にリンパ節の構造が確かめられたが、リンパ節辺縁にも増殖が顕著で直接浸潤の可能性が否定できない。2 相型の他の 1 例は腋窩に孤在性に再発しリンパ節転移と判断された。さらに単相型の 1 例は腋窩部原発で、再発時も腋窩にあり、直接浸潤の可能性が否定できない。

横紋筋肉腫も滑膜肉腫と同様に多結節状に発育増大

表 1 滑膜肉腫

No	症 例	年令, 性	発生部位	組 織 型	リンパ節転移部位	初回手術より 転移までの期間	予 後
1	Y. M.	47 F	手 (右)	二相型	腋 窩	16 年	20 年生存
2	M. G.	44 F	大腿 (右)	二相型	鼠 径 部	6 年	7 年死亡
3	R. K.	52 F	腋窩 (左)	単相型	腋 窩	1 年	1 年 4 カ月生存
4	M. H.	51 M	下腿 (左)	二相型	鼠 径 部	1 年 8 カ月	6 年生存
5	K. M.	38 F	大腿 (左)	単相型	肺 門 部	剖 検 時	5 年 8 カ月死亡
6	T. M.	43 F	大腿 (右)	単相型	肺 門 部	剖 検 時	10 カ月死亡

表 2 類上皮肉腫

No	症 例	年令, 性	発生部位	リンパ節転移部位	転 移 の 時 期	予 後
1	T. S.	24 M	拇指 (右)	腋 窩	初回手術時	6 年 死 亡
2	S. A.	61 M	前腕 (右)	腋 窩	初回手術時	7 カ月生存

表 3 横紋筋肉腫

No	症 例	年令, 性	発生部位	組 織 型	リンパ節転移部位	転 移 の 時 期	予 後
1	M. K.	2 F	大腿 (左)	胞巣型	鼠径～腹腔	初回手術時	1 年 2 カ月死亡
2	S. Y.	26 M	大腿 (右)	胞巣型	鼠径～外腸骨動脈	初回手術時	5 カ月死亡
3	S. K.	21 M	足 (右)	胞巣型	鼠 径	初回手術時	1 年 死 亡

する傾向が強く、組織学的にリンパ節の構造が認められるが、リンパ節辺縁の増殖も著明で、さらに大動脈周囲などリンパ節のある部位に連続性に発育する傾向の強いことを考えると、リンパ節転移が直接浸潤かの判断は困難のことが多いと思われる。

類上皮肉腫はしばしばリンパ球を中心とした高度の炎症細胞浸潤を伴うことがあり、解剖学上の発生部位、明らかなリンパ節の構造の有無でリンパ節転移か否かを慎重に判断すべきである。

NCIのRosenbergら¹⁾は113例の骨および軟部肉腫で手術時リンパ節転移のあった例はわずか6例であったとし、予防的リンパ節廓清の意味はほとんどないとしている。しかしながら化学療法に対する感受性の高い横紋筋肉腫は別にして、滑膜肉腫、類上皮肉腫は転移までの期間を含めて全体に経過が長い例が多く、わ

れわれは予防的リンパ節廓清を行うことにしている。この意義については、今後症例の長い経過観察と、症例の蓄積が必要と思われる。

参 考 文 献

- 1) Weingrad, D.N. and Rosenberg, S.A.: Early lymphatic spread of osteogenic and soft-tissue sarcomas. *Surgery* 84: 231-240 1978.

質 問 福岡大学 葉山 泉
下のリンパ節廓清はどの程度行われているのか。

解 答 国立福岡中央病院 横山庫一郎
予防的リンパ節廓清は解剖の図譜を参考に行っているが100%とれているかどうかはわからない。

~~~~~